

翻訳家堀口大学を巡る一考察—ポール・モーランという言説

大村 梓

Horiguchi Daigaku's Translation Practice and its Connection to Paul Morand in Japan

OMURA Azusa

Abstract

The Meiji Restoration (1868) required Japanese to create a new kind of written language appropriate for describing modern Japan. Some novelists maintained a traditional style influenced by the Chinese classics, others actively learned new expressions from translations of Western literature.

Horiguchi Daigaku was one of the most important of the translators through the Meiji, Taishō and Shōwa periods. He cultivated his passion for literature by composing traditional verse in the genre called Tanka and also Shintaishi (a new style of poetry), and further translated French poetry. *Gekka no ichigun* (Poets Under the Moon), a translation volume of 340 poems written by 66 French poets, was published in 1925 and it gave an excellent start to his career as a translator. Aside from poetry, he translated some French modernist novels, especially the fiction of Paul Morand. Most Japanese translations of Morand's novels were made by Horiguchi and Morand had been unknown before Horiguchi introduced him to Japanese literary society. Horiguchi repeatedly wrote of Morand as a modernist writer and argued his language was exotic and novel. This perspective undeniably influenced Japanese readers' views of Morand's works.

This paper will focus on three issues in order to investigate how the reputation of Paul Morand was created in Japanese literary society of the 1920s and 1930s. First of all, evaluating Horiguchi Daigaku as a translator in respect of his influence on the reputation of Morand's works. Second, describing how Horiguchi's reading of Morand's novels guided readers' understanding of Morand's use of language and also of the author himself. Third, drawing a picture of how literary society in Japan at that time vitally needed something exotic that could satisfy their aspiration for western/ modern culture. I will demonstrate how Morand's Japanese translations were influenced by Horiguchi's reputation as a translator, his essays on Morand and contemporary Japanese literary trends.

キーワード：堀口大学、ポール・モーラン、翻訳、近代日本文学、異国趣味

key words: Horiguchi Daigaku, Paul Morand, Translation, Modern Japanese Literature, exoticism

はじめに

明治維新（1868年）から後、日本は西欧の影響を受けながら近代化への道を進んでいった。徳川幕府下の江戸時代から様相は一変し、明治という近代政府の到来と共に、日本は新しい規範や文化を樹立することが急務となった。そのような社会の動きの中で、日本の文学者たちは、この「新しい時代」を描く言葉が必要となった。近代日本

が西欧の影響下にあったことを踏まえて、「近代の言葉」は強く西欧文学の翻訳語に影響を受けることとなる。「近代の言葉」を作り出すためには、何度も繰り返し文学作品の中で扱われ、様々に定義され、そして読者に受容されていく過程が必要となった。そういった日本近代文学者たちの「新しい言葉」への挑戦を支えたのは、この文化的激動の時代に活躍した翻訳者たちである。彼らの翻

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

訳から日本作家たちは新しい表現を学ぶ以上に、西欧の文化に触れることとなったのであった。

明治維新からの近代日本において、現代の礎となる文学潮流であるモダニズム文学が生まれた。西欧文学との比較により、その意匠や主題に焦点が当てられ、日本モダニズム文学は研究されてきた。しかしそもそもの翻訳の過程でどのような文化的受容がされたのかということについての詳細な研究はまだ始まったばかりである¹⁾。西欧の文学はそのまま「新しい表現」のお手本のような形で受容されたのか、それとも西欧の文学表現を「日本的」に導入することが行われたのか、それには個別の翻訳を見ていかなければいけない。

本論文は主に 20 世紀初頭から戦後まで、フランス文学翻訳の分野で第一人者として知られてきた堀口大学 (1892 - 1981) に焦点を当て、彼が熱心に翻訳したフランスモダニズム作家であるポール・モーラン (1888 - 1976) を取り上げる。当時の文壇にとっての「翻訳家堀口大学」の存在と、堀口が作り上げたモーラン像、そして当時の日本文壇の文学的潮流の三つを軸に、近代日本文学においてモーランという言説がどのようにして作り上げられていったのかを明らかにしたい。

近代文学と翻訳家堀口大学の誕生

まず翻訳家であり、文学者でもある堀口大学を育て上げた時代背景・文化的背景を紐解いてみたい。そもそも翻訳という行為は、文学的文脈でどのように必要とされたのだろうか。明治維新後の近代化の過程で幅広い分野の書物が翻訳されたが、文学的文脈で言うのであれば、翻訳という行為は近代の言葉を作り出すのに大きな役割を担っていた。それは自分たちの言葉で考え、自分たちの言葉で語るという自然な願望から生まれた衝動であった²⁾。

明治維新後の文壇で、西欧文学の翻訳がさかに行われた時期を少し振り返ってみたい。正宗白鳥 (1879 - 1962) は「日本文学に及ぼしたる西洋文学の影響」と題された文章において、当時の読者にとっての翻訳文学の意義についてこう述べている。

[...] 自然主義前の日本の文壇で最も西洋文学の味はひを伝えて、あの時代の青年の心を魅惑し、或ひは作中の人物に共鳴を覚えさせた翻訳は、二葉亭の「浮草」、小金井きみ子の「浴泉記」、森鷗外の「即興詩人」である。西鶴の影響を受けたといふ紅葉、露伴などの小説によつて得られないものをそれ等の翻訳小説から得た。自国の小説よりも、それ等の外国小説に於て、我々は自己の影を見た。自己の夢を見た。或ひは自己の心に潜んであるものを引出される感じがした。[...] ³⁾

正宗が述べているように、西洋文学の翻訳を前にして読者が期待するものは彼らの憧れを満足させる異国の姿である。作中の人物は、彼らが共感することのできる異国の人でなくてはならない。これは当時の日本人の異文化理解が *exoticism* (異国趣味) の範囲を超えていないことを表わしている。

また上田敏 (1874 - 1916) は、西欧詩の訳詩集である『海潮音』を 1905 年に発表した。この詩集にはフランスをはじめとする西欧諸国の詩人の作品が所収されている。特徴としては、高踏派と象徴派の作品を訳において区別し、表現の違いにまで言及して西欧詩を日本読者に紹介しようと試みたことである。また西欧の批評家の作品批評も同時に収められていて、それはまるで西欧詩の教科書のように見える。

明治維新から 24 年後の 1892 年に堀口大学は誕生している。堀口が青年期を迎える頃にはすでに西欧文学の翻訳熱は高まりを迎えていた。つまり彼は必ずしも日本人読者が翻訳へ、異国文化へと強い憧れを持っていたその始まりから活躍していた翻訳家ではない。

堀口大学は外交官である父・久萬一、母・政のもとに生まれた。幼くして生みの母を亡くし、久萬一は堀口が 7 才のときにベルギー出身のスチナ・ジュッテルンドと再婚している。堀口自身は幼い頃から父方の祖母のもとで新潟で育てられる

が、外交官の父親とベルギー人の義母を持った家庭環境は、堀口の当時としては類まれなる国際感覚に大きな影響を与えたと考えられる。堀口は17歳の時に東京へとやってくるが、第一高等学校仏法科入試に失敗し、それまで育ててくれた祖母が亡くなるなど、不安定な青春期を過ごしている。その頃、堀口は雑誌『スバル』(1909 - 1913)を手に取り、与謝野晶子(1878 - 1942)に代表的な明星派の短歌と出会う。そしてその年(1909年)に堀口は新詩社に入ることによって、その文学人生を本格的に始めることとなるのだった。新詩社での活動は創作活動の場だけではなく、堀口に生涯の友となる佐藤春夫(1892 - 1964)との出会いをもたらした。彼らは共に慶應大学で学び始めるが、堀口は1911年には大学を中退し外交官である父親の任地メキシコへと旅立つ。その後、彼はホノルル、メキシコ、ベルギー、スイス、フランス、スペイン、ブラジル、ルーマニアと多くの国々を訪れることとなる。そして1925年に日本へと帰国した堀口は訳詩集、『月下の一群』を発表する。そしてこの訳詩集によって、堀口は翻訳家として広く日本文壇に知られることとなるのである⁴⁾。

一方、モダニズムという芸術運動は20世紀初頭に西欧で起こり、日本へとやってきた。そもそもこの芸術運動が世界的規模を持って国境を越えて若手芸術家に受け入れられた要因は、18世紀の産業革命を背景にした資本主義・消費社会の到来と、大量破壊兵器の導入でもって人的・物的被害が想像を絶する規模で生じた第一次世界大戦をその背景として持っているからであった。日本モダニズムに関しては、消費社会や都市生活という面においては西欧諸国と共通しているが、第一次世界大戦ではその国土が戦場となっていないので、必ずしも西欧諸国の若手作家たちと同じ社会的背景を持っているとはいえない。日本独自のモダニズム文学の背景としては、1923年に発生した関東大震災の方が大きく影響を与えている。日本モダニズム文学は、主題としては近代社会への期待や孤独感などを取り扱っている。

日本モダニズム文学の重要なグループであるとされた新感覚派は、自らを新感覚派と名乗ったわけではない。横光利一(1898 - 1947)や川端康成(1899 - 1972)をはじめとする若手作家たちによって創刊された雑誌『文芸時代』(1924 - 1927)に掲載された作品の表現を、外部の批評家である千葉亀雄がフランスモダニズム作家であるポール・モーランの表現と比較して、「新感覚派」という名前を彼らに与えたのであった⁵⁾。これによって、日本モダニズム文学、新感覚派、モーランの関係が日本文学史に刻まれることとなる。そしてこの関係性には当然のことながら、モーランの作品のほとんどを翻訳している翻訳家堀口大学も関わってくる。

翻訳は近代化の過程で常に必要とされてきた。翻訳家堀口大学を他の翻訳家と区別する要因としては、彼自身の生い立ちと家庭環境が一番大きいものであろう。この当時としては特異な国際結婚という家庭環境と、外交官の父親に同行していった諸国遊学、フランスでの芸術家たちとの交流といったコスモポリタンのイメージが彼の文学活動には常について回った。つまり日本人読者たちは彼の詩を、随筆を通して、フランスや西欧諸国の姿を見たのである。しかし忘れてはいけないのは、堀口が訳している世界は、遠くにあって憧れているものではなくて、彼が青春期を過ごした世界である。堀口は日本人読者たちの西欧文化への憧れや期待を十分に理解していたと考えられる。彼は1932年に「エキゾチズムに関するノオト」という文章で、外国文学の翻訳が盛んに行われている現状を振り返って、エキゾチズムを次のように定義づけている。

厳格な意味で、外国文学は文学としては存在しない。それは常に外国文学である筈だ。

外国文学に対する興趣は、エキゾチズムの一種だ。

エキゾチズムの対象としての文学の価値。文学の外国価値。

[…]

エキゾチズムは、満されると同時に失はれる興味だ。だからその対象は常に変化する。個人的にも、国民的にも、時代的にも。

エキゾチズムの対象にも流行がある。⁶⁾

堀口は外国文学の翻訳家である自分に読者が期待する役割が、部分的にはこの「エキゾチズム」を満たすものであると考えている。そしてエキゾチズムの対象が常に変化し、いずれ廃れていくものであると冷静な目で捉える。これは外国文学一般の話であると同時に、堀口が当時の日本文壇での自分自身の立場を冷静に、客観的に見た記述でもあるだろう。

堀口大学の翻訳論

堀口の翻訳論を『月下の一群』から、フランスモダニズム作家ポール・モーランの翻訳まで振り返ってみたい⁷⁾。

堀口の翻訳家としての出発点となったのが、『月下の一群』であることに誰も異論はないだろう。この訳詩集にはフランス近代詩の66詩人の作品(340編)が含まれている。堀口によれば、それまで10年間の仕事の中から選りすぐりったものがこの訳詩集には所収されている⁸⁾。堀口が自らこの訳詩集が近代詩の「見本帖⁹⁾」であると述べていることから、この訳詩集がフランス近代詩を日本人読者に紹介する、という広い目的を持っていることがうかがえる。堀口はこの訳詩集で試みたその翻訳の方法論について、この訳詩集の序論で明確に述べている。

読者の見らるるとほり、私がこの集の訳に用ひた日本語の文体には、或は文語体があり、或は口語体があり、硬軟新古、実にあらゆる格調がある。然しそのいずれの場合にあつても、私が希つたことは、常に原作のイリュージョンを最も適切に与へ、原作者の気稟を最も直接に伝へ得る日本語を選びたいと云ふ一事であつた。¹⁰⁾

堀口は自らの試みが近代詩の中でも原文の表現の違いを、日本語の語調の中(文語体・口語体)で区別して表現しようとしている、原文に忠実な形の翻訳であったと主張する。この序論が所収されている『月下の一群』が刊行された3年後の1928年10月に、『新編 月下の一群』が刊行された。この新しい編においては、所収された作品に多少の取捨選択が行われた。堀口によればその意図は「仏蘭西近代詩の詞華集としての性質¹¹⁾」(ルビは著者による)を初版よりも強く持たせるためであった。すでに初版の刊行から、堀口は詩人ごとの詩集(『ヴェルレエヌ詩抄』[1927年2月]、『アポリネール詩抄』[1927年12月]、『フランシス・ジヤム詩抄』[1928年6月]等)を発表していたために、この『月下の一群』にはフランス近代詩のより体系的な訳詩集としての役割が必要であったと考えられる。初版の序文で述べたような、単なるフランス詩の「見本帖」としての役割はすでにこの時には失われていたのだ。これはまた、堀口の翻訳家としての読者の需要への敏感な態度も同時に表しているといえるだろう。

堀口は、詩の翻訳と同時に散文の翻訳も行っていった。これまで堀口によって日本語に翻訳されたポール・モーランの訳文・訳詩の初出年表を以下にあげる。

表 1¹²⁾

年	題
1922 (大正 11)	<u>11月</u> 「北欧の夜」『明星』2 (6) (『夜ひらく』の一部)
1924 (大正 13)	<u>7月15日</u> 『夜ひらく』新潮社
1925 (大正 14)	<u>5月</u> 「ポルトヒノ・クルムの夜」『明星』、6 (5) <u>6月</u> 「バビロンの夜」『新小説』、30 (6) <u>6月17日</u> 『夜とざす』新潮社 <u>7月17日</u> 『レキスとイレエン』第一書房 <u>7月</u> 「恋慕流し」『明星』7 (1) <u>9月</u> 「ものぐさ病」『明星』7 (3) (『恋の欧羅巴』の一部) <u>10月</u> 「三面鏡」『女性』8 (4) (『恋の欧羅巴』の一部) <u>12月</u> 「モオラン綺語」『不同調』1 (6) 「夜に対峙するホテル」・「西の公園で」『明星』7 (5) <u>12月19日</u> 『恋の欧羅巴』第一書房
1926 (大正 15, 昭和元年)	<u>1月</u> 「クラリス」『明星』8 (1) (『三人女』の一部) <u>4月</u> 「たったこの地球だけでは」『奢覇都』3 (3) (<i>Rien que la terre</i> の一部) 「公衆浴場」・「敬礼」『明星』8 (3) 「ビヂネス」『文章往来』1 (4)
1927 (昭和 2)	<u>10月</u> 「デルフィン」『改造』9 (10) (『三人女』の一部)
1928 (昭和 3)	<u>1月5日</u> 『三人女』第一書房
1958 (昭和 33)	<u>11月25日</u> 『4に生きる男』講談社

この表を見ると、堀口が1925年に初めての訳詩集である『月下の一群』を発表する以前から、モーランの作品を翻訳していたことが分かる。堀口が取り上げた他の詩人・作家たちが、他の翻訳者たちによっても翻訳されていた（つまり他の翻

訳が存在した）のに対して、モーランの日本語訳はほとんどが堀口一人によるものである。つまり堀口の翻訳家としての役割の影響を一番受けやすいのが、モーラン作品の日本語訳である。すでに1924年のモーラン作堀口訳『夜ひらく』の出版

の前から、堀口は『三田文学』、『現代詩歌』、『明星』などに訳詩や訳文（自らの詩や散文も）を発表していた。一方、モーランは堀口が日本文壇で紹介するまで無名であった。

堀口はモーランの紹介文を多く残している。何度も同じような表現を用いて、モーランの紹介文は訳書の序文に、そして『明星』にも登場している。そこには『月下の一群』に見られたような、修辭的工夫に焦点を当てた翻訳論は見られない。堀口はそれらの文章において、モーランがいかに新しく、モーランがいかに世界主義的で、モーランが日本の新感覚派に影響を与えたことを強調する。これらの文章を読者が何度も目にするによって、読者のモーラン作品像にも大きな影響を与えただろうことは否定できない。

堀口は戦後もモーランの作品を翻訳している。1958年に訳された『1/4秒に生きる男』である。実は、モーランは戦後はフランス文壇から追放されていたために、その文脈で考えれば決して翻訳されるのにふさわしい作品ではない、といえるだろう。堀口はこのあとがきでも、モーランを戦前と同じような言葉を用いて読者に紹介する。

川端康成、横光利一なぞ、当時日本に於ける第一流の若き世代の作家たちを刺激して、新感覚派と呼ばれる華々しい画時代的な文学運動を生み出すきっかけとなったと言われるこの作家の『夜ひらく』を翻訳してから三十四年の歳月が過ぎた。

[…]

現代はスピードの時代だ。モーランはスピードのためにスピードを愛する一人の男を拉し来って、その男の生活の喜劇と悲劇を軽妙な筆に載せて笑わせてくれるが、これは、《実用向きであると同時に狂的でもある》現代人に共通な喜劇であり、悲劇である。つまり君の悲劇でもあり、僕の喜劇でもあるというわけだ。僕等は描かれた自分の漫画像を眺めて笑っているのである。¹³⁾

ここでもまた、モーランと新感覚派との相似、

そして現代を描くモーランの新しさが指摘されている。戦間期から戦後にかけて、堀口のモーラン像がほとんど変わっていないことが分かる。

堀口大学の翻訳の一例：ポール・モーラン

ポール・モーランは1888年にパリに生まれた。1920、30年代のパリはモダニズム芸術が花開いた街として有名だが、そのようなある種芸術的に高揚した雰囲気の中でモーランは国際的教養を持つ作家（コスモポリタン）として人気を得ていた。モーランは作家として評価を得る前に、外交官としての仕事を始めている。外交官としてモーランはヨーロッパ各地はもちろんのこと、アメリカや日本など、世界中を訪れている。モーランの作品の特徴をマルセル・プルースト（1871-1922）は、比喩やイメージが多用されており、それがまた彼の特徴でもあるのだが、時としてその比喩の乱用とでもいうものが、作品の主題をわかりづらくさせ、あらぬ誤解を招くだろうと指摘する。プルーストは、この若き作家がルノアールが世に出てきたときに味わったような、世間からの厳しい批評を浴びるのではないかと危惧している¹⁴⁾。そのように本国でもその表現の解釈の難しさから、目新しさはあっても理解されづらいと捉えられていたこのモダニズム作家が日本へとやってきて、若い読者からこれほどの人気を得るとは誰も想像できなかったであろう。

戦間期にはモダニズム運動の寵児として高い評価を得ていたモーランであったが、第二次世界大戦の足音が近づくにつれて、モダニズム運動そのものの活気が段々と失われていった。戦時中に親独ヴィシー政権に協力したために、モーランは戦後スイスに滞在せざるを得なくなり、長らくフランス文壇への復帰は叶わなかった。戦後しばらくして、ようやくフランスに帰国の願いがかなったが、帰国後は旅行記の執筆を行うなど、戦前に見られた作家としての勢いは明らかに失われていた。異国体験に基づいた想像世界と、外交官としての冷静な世界的視野を持った社会批評がモーランの作品の特徴であった¹⁵⁾。

フランス人作家であるポール・モーランは、1922年に雑誌『明星』において堀口によって初めて正式に日本に紹介された。掲載された「北欧の夜」は後に出版される『夜ひらく』（1924年）の一部であり、フィンランドのヌーディスト団体を描いた、当時としては過激な内容であった。

『明星』に初めて作品が載った時のモーランが、いかに日本文壇で無名であったのかは、その訳文の掲載のされ方を見ればすぐにわかる。同じ号に鈴木信太郎訳のステファン・マラルメの詩が掲載されているので、それと比較してみたい。マラルメの詩のタイトルの左下に原作者であるマラルメの名、そしてその左すぐ横に訳者である鈴木の名が、「鈴木信太郎訳」と載っている¹⁶⁾。しかし堀口の場合は、訳文のタイトルのすぐ左の、本来は副題が載せられるであろうところにタイトルよりも小さいフォントで「ポオル・モオラン」と記載されている。そして作者の名前が通常は表示されるタイトルの左下には、「堀口大学」と記載されている。しかも、鈴木の場合のように「訳」と名前の下にはついていない¹⁷⁾。

そして堀口は「北欧の夜」の付記でモーランを以下のように紹介する。

訳者、付記。

「北欧の夜」にはもつとこの先があるのだが、そしてその先がもつともつと面白いのだが、私は未完のままこの小説を終りにいたします。

読者よ、私を叱り給ふな。もしも私がこの先を訳したなら、私の本は焚かれ、私はふんじばられて獄屋へ入れられる事とせう。

然しそれにしても、私は、一言、原作者の PAUL MORAND に就いて語らずにはこの稿を了る事が出来ないのです。

[…]

ポオル・モオランは、まれに見る豊富な才能を持つた、天成の作家であり、彼の「夜開」はあだかも、書家の上に於て、かの印象派の開祖マネがなしたと同じ程度に根本的な革新を文学上に於て成就したものであると云ふこ

とに皆の意見が一致してゐるやうです。つまり彼の「夜開」は仏蘭西文学の上に一新時代を画す白石を置くものです。

ポオル・モオランの小説にあつては、すべてが新しい。既にその題材が新しい。感覚が新しい。文章が全全新しい。ポオル・モオランは仏蘭西語に一つの新しい生命を与へた。[…]¹⁸⁾

堀口はモーランを新しい作家であると紹介する。新しいことが歓迎されていたモダニズムが日本文壇で隆盛を極めていた時代に、モーランの存在はその新しい文学の例として最適な存在であつただらう。

堀口は数多くのモーラン評を書き記している。ポール・モーランというフランス作家を初めて眼にした読者たちは、すでに日本文壇で名が知られている堀口のモーラン観を手がかりに作品を読み進めていくこととなる。それはつまり、モーランという作家の作品をどのように読むべきであり、どのような衝撃を日本文壇に与えるのかを、その結果より前にすでに目の前に出されている状態とも言える。

以上のように見ていくと、堀口大学のポール・モーラン観が日本文壇のモーランを巡る言説の基礎として置かれていく過程が分かる。しかも堀口の翻訳に関しては、「堀口君の仏蘭語と日本語とは、十分信頼していい物だと以前から思つてゐる。¹⁹⁾」（傍点は著者による）と批評家生田長江が述べるように信頼が置かれ、それ自体が議論的とされることはない。

次に堀口がモーランの作品に特徴的な要素（異国表象と社会批評）をどのように定義づけていたのかを見ていこう。モーランの作品のほとんどには、外国人が主要な登場人物（特に退廃的な生き方から悲壮な運命を辿る女性）として描かれ、その舞台も外国（カタローニャやローマなど）となることが多い。そういったモーランの異国性を堀口は世界主義と呼ぶ。

十八の時以来、モオランが学んだ学校では、いつもフランスは外国として取扱はれてゐたものだと言はれてゐる。彼が学んだ地理学は、世界地理であり、彼が学んだ法律は、国際法であり、彼が学んだ歴史は外交史、つまり、国と国との間の関係の歴史だつたのだ。彼は先天的にも後天的にも世界主義の文学者として生れ、育つて来てゐる。²⁰⁾ (傍点は著者による)

実はこういったモーランの世界主義が結局のところ、フランスを中心とした視点であり、戦時中のモーランの行動を予感させる要素が彼の作品の中には存在すると指摘されている²¹⁾。

堀口は、モーランが「現代」の作家であることを繰り返し強調する。

[...] 他方また、現代人の風俗思想が、一種常軌を逸してゐることも疑ふ余地がない。現代は「活動」と「興奮」を穿きちがへた時代だ。金儲けに対する際限のない欲望と動揺の多いあわただしい生活と、スピーデイな交通機関にひきずりまはされる奔走とが、何時か知らぬ多くの現代人の心と神経に異状を来した。然もこの世界的大混乱の中にあつて、人々は確固とした、安心を与へる力のある信仰を持たない。²²⁾

ここで強調される「現代」は堀口によって明らかに定義づけられている。これらの言葉によれば「現代」は、一過的な時代であり、伝統からはかけ離れているが、しかしその状態が長く続くとは印象付けられない。まるで遠足を前にした子供が興奮して熱に浮かされてゐるような雰囲気はこの文章は醸し出している。確かにこのような「現代」を描くにはモーランの作品は適しているかもしれないが、モーランが語っている「現代」が持つ特徴はこのようなものだけではない。彼はその外交官という職業から社会・政治問題に関しても非常に造詣が深かった。その彼の経歴から自ずとそう

いった異国描写というのが、文化だけにとどまらない政治的な問題にまで踏み込まれているのは、作品を仔細に見ていけば明らかである²³⁾。

このようにモーランの作品の主題に関するまで、堀口大学の観点が繰り返し読者に提供されている中で、作品の特徴である世界主義（異国表象）や現代性（社会批評）はどのように訳されていたのだろうか、原文と堀口訳を比較しながら当時の社会情勢を背景に分析を試みたい。

日本におけるポール・モーランの代表作である『夜ひらく』(*Ouvert la nuit*, 1922) には、6つの物語が所収されている。第一次世界大戦時には国土が戦場となり、多大な人的・物質的損害を受けた不安定な欧州諸国がどのように新しい希望を見つけ出し、新しい時代の幕開けを受け入れるのか、ということがこの作品の主題である。しかし日本は第一次世界大戦には参戦したものの、人的・物質的被害はほとんどなく、この作品に充満する鬱屈とした雰囲気はどこまで当時の日本人読者が理解できたかは不明である。この時代を生きるフランス人男性の視点から物語は進んでいく。そこには確かに堀口のいうところの世界主義や現代性が描かれているが、それは当時の日本人が感じていた世界主義や現代性とは必ずしも一致しなかっただろう。

モーランは彼にとっての現代性を「une génération sacrifiée」(犠牲にされた世代)に見出す。「La nuit romaine」(ローマの夜)では娘の扱いにほとんど困ったフランス人女性に、フランス人男性は娘の世話を頼まれる。母は娘を全く理解できないと嘆く。それに対して、フランス人男性は次のように答える。

— C'est une génération sacrifiée, madame, les hommes sont devenus soldats, les femmes sont devenues folles. Le destin y a ajouté encore avec un joli lot de catastrophes. En fait, Isabelle est victime de ce contre-snobisme auquel une âme délicate adhère tôt ou tard,

qui oblige à ne fréquenter les gens qu'après s'être assuré qu'ils n'ont aucun titre à une amitié intéressée.》²⁴⁾

「les hommes sont devenus soldats, les femmes sont devenues folles.」(男は兵隊になり、女は気が狂ってしまったのです。)との言葉は、第一次世界大戦を明らかに示唆している。この作品がフランス読者に受け入れられた理由は、この社会的背景による時代性である。では、堀口はこの時代性をどのように訳しているのだろうか。

「—犠牲にされた—ジエネレーションです。奥さん。男たちは皆兵隊になり、女たちは皆気狂ひになつたのです。運命はそれでも足らずにもつと様々の災難をそれに加へたのです。つまりイザベルはコントロール・スノビズムの生贄になつてゐるのです。感じ易い心を持った人間は早晚だれでもこのコントロール・スノビズムの影響を受けて、先づ人と交際する前にその人が何か利用する所があつて友情を示すのではないかと疑つて見て、さうでないことが分つた上で始めて人と交際するやうになるのです。』²⁵⁾

後半部分の疑心暗鬼に陥った世の中を表現している箇所に関しては、近代化によって旧来の社会が崩壊し、伝統的規範や価値観を失いかけている日本人読者にも受け入れられるだろう。しかし前半部分を理解できた日本人読者はどれだけいたのだろうか。

堀口が初めてモーランの作品を『明星』で紹介したときに掲載された作品が「北欧の夜」であることから、堀口が6つの作品の中でもその作品がよほど読者の気を引くと考えていたことがうかがえる。しかし実際、「北欧の夜」は他の作品の中でも特に裸体の描写などがあからさまなものとなっており、そこに隠されている欧州に忍び寄る人種差別的雰囲気を読者が読み取ることはほとんど不可能だったのではないかと考えられる。物語の冒頭で、モーランはフランス人男性

Pierre から、この『夜ひらく』の原稿を受け取ったかのように記述している。Pierre は世界中を旅してきたために、自分自身の核がなくなってしまうと嘆く。

[...] Des volumes dépareillés, des journaux...
Jamais un Français de mon âge. J'y ai perdu l'habitude de la parole et c'est ce qui en France me dépayse le plus. [...] ²⁶⁾

[...] 要するに僕は、手当り次第の書物と新聞とだけで仕上げた男なのだ……。それに僕と同年輩の仏蘭西人と交際あつたことは一度もなかつたのだ。お蔭で僕は仏蘭西語を話す習慣を失つてしまつた程だ。為めに僕は仏蘭西にゐる時でも外国にゐるやうな気がするのだ。[...] ²⁷⁾

Pierre は「J'y ai perdu l'habitude de la parole et c'est ce qui en France me dépayse le plus.」(僕はフランス語を話す習慣をなくしてしまつたのだ。これがフランスで最も僕を居心地悪くさせるものだ。)と告白する。それを堀口は「お蔭で僕は仏蘭西語を話す習慣を失つてしまつた程だ。為めに僕は仏蘭西にゐる時でも外国にゐるやうな気がするのだ。」と訳している。ここで話題になっている「la parole」(言葉)がフランス語という言語そのものだけを指しているわけではないことは、収められている他の話を読んでいけば分かる。「ローマの夜」では母にとって娘は同じフランス人でも全く理解し合えない存在となっているが、そういった文化的・社会的な大きな変化を目の前にして同じ国の人間でも理解し合えない現状を表している。これは世界各地を回って、外側からフランスを見ていた外交官であるモーラン独自の視点である。外から母国を見ているからこそ、母国の危機や欠点が浮かび上がってくる。しかしそこには同時に母国に対する愛情も溢れているはずだ。もしかしたら、堀口は自分自身の経験をここに投影させているといえるのかもしれない。彼もまた長期の海外滞在を終え、帰国した日本文壇を眼の前に、

「日本にいる時でも外国にいるような気が」していたのかもしれない。いずれにしてもモーランのこのような世界主義に対して、日本人読者たちはモーランの作品を読み、彼らの異国趣味を満たさせる。両者の認識下での世界主義は明らかに異なるだろう。批評家である生田長江が1925年にモーランの作品を江戸末期の好色本と変わらないと批判したように²⁸⁾、表現や描かれている西欧文化の新しさは理解できても、モーランの鋭い社会批評や異国表象を理解できた日本人読者は堀口以外にはほとんどいなかったと考えられる。

おわりに

翻訳という行為は、言語間の変換を単に指すのではない。言語が属する文化は常に言葉に付随し、それは翻訳テキストの文化圏にとって簡単に受け入れられる場合もあれば、受け入れ難い場合もある。また受け入れ難いと翻訳者が判断した場合には、翻訳テキストは原文より大幅に変更される可能性もあるだろう。この論文においては、翻訳者堀口大学によるフランス作家ポール・モーランの日本語訳に焦点を当てた。これは複数の翻訳者の翻訳活動が深く関わっていないために、翻訳者堀口の役割がより際立った例である。

日本においてポール・モーランが紹介される前に、翻訳者堀口大学という存在が当時の日本文壇に強く印象づけられていた。西欧帰りの堀口が紹介する作品は新しく、世界主義的であるという期待は、彼が翻訳する作品の印象に大きく影響する。その作家が他の誰にも訳されていない場合は、その規模はより大きくなる。そして繰り返しモーランの作品は新しく、世界主義的であるという言説が堀口によって語られる。それは関東大震災後に文化の担い手が若い世代へと移っていた当時の文壇の潮流に、ぴったりと合致していたのであろう。だからこそ、日本モダニズム文学の代表的グループである新感覚派は、それがどれほど真実かはさておき、モーランの文体に影響を受け誕生したかのように定義された。

このように戦間期の日本におけるポール・モーラン受容は、日本文壇における翻訳家堀口大学自

身の印象、堀口が作り出したモーラン言説、そして当時の文壇における文化的流行の3つから影響を受けて、複雑に繰り返し解釈され続けることとなる。そして、この日本モダニズムという戦間期の重要な文化潮流の一部は明らかに堀口訳モーラン作品に影響を受け、誕生し、その後の文学へとつながっていったのだ。

注

- 1) これまでも比較文学的視野でもって翻訳研究は行われてきたが、特に翻訳の文化的影響について焦点が当てられるようになったのは20世紀後半に欧米を中心に見られる Cultural Turn と呼ばれる文脈において Translation Studies という領域がさかんになってからである。翻訳研究の体系的な研究書としては、Munday, Jeremy, *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*, London; New York: Routledge, 2001 が挙げられる。
- 2) 明治・大正の翻訳史に関しては次に詳しい。吉武好孝『明治・大正の翻訳史』研究社、1959。
- 3) 正宗、「日本文学に及ぼした西洋文学の影響」、10
- 4) 堀口大学の伝記的研究書としては、次が挙げられる。関容子『日本の鷺：堀口大学聞き』岩波書店、2010。長谷川郁夫『堀口大学：詩は一生の長い道』河出書房新社、2009。
- 5) 千葉、「新感覚派の誕生」、293 - 298。この新感覚派とポール・モーランの関係性に関しては、次の論文に詳しい。Omura, Azusa, 'The Birth of Shinkankaku-ha: *Bungeijidai journal and Paul Morand*', *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, 12(1), 2012
- 6) 堀口、『堀口大学全集 第7巻』、179
- 7) これまでの堀口によるモーランの翻訳に関する研究としては、数は少ないが次のものが挙げられる。渡邊一民『フランスの誘惑：近代日本精神史試論』岩波書店、1995。土屋聡「大正期における堀口大学の翻訳」『日本近代文学』、75、2006、87 - 102。
- 8) 堀口、『堀口大学全集 第2巻』、7
- 9) 同上、7
- 10) 同上、7
- 11) 同上、545
- 12) この表は、堀口大学『堀口大学全集 別巻』小澤書店、1988を元に筆者によって作成された。
- 13) モーラン、『1 / 4秒に生きる男』、233 - 234
- 14) Morand. *Nouvelles complètes*, vol.1, 11
- 15) モーランの伝記的研究としては次に詳しい。Guitard-Auviste, Ginette. *Paul Morand, 1888-1976: légende et vérités*, Paris: Hachette littérature générale, 1981。また、

- 作品論としては Michel Collomb が詳しい注と解説をモーランの全集に寄せている。Morand, Paul. *Nouvelles complètes*, vol.1 et vol.2, Paris: Gallimard, 1992.
- 16) マラルメ (鈴木訳)、「フォオヌの夜」、27
 17) モオラン (堀口訳)、「北欧の夜」、177
 18) 同上、187 - 188
 19) 生田、「文壇の新時代に与ふ」、50
 20) 堀口、『堀口大学全集 第5巻』、629
 21) Morand. *Romans*, xxiii-xxv (Collomb による解説。)
 22) 堀口、『堀口大学全集 第5巻』、630
 23) 特に *Champions du monde* (『世界選手』、1930) においては、共産主義と資本主義の狭間で苦悩する、出自が様々に異なるアメリカの若者たちが描かれている。この作品論に関しては、次の論文を参照せよ。大村梓「ポール・モーランと横光利一：*Champions du monde* と『上海』に描かれたディストピア」、*Polyphonia*、3、2011、43-66
 24) Morand, *Nouvelles complètes*, vol.1, 127
 25) モオラン (堀口訳)、『夜ひらく』、143-144
 26) Morand, *Nouvelles complètes*, vol.1, 72
 27) モオラン (堀口訳)、『夜ひらく』、8
 28) 生田、「文壇の新時代に与ふ」、53

参考文献

- * 引用に際して旧漢字は新漢字に改めた。またルビは一般的なものからは外した。
- 生田長江「文壇の新時代に与ふ」『新潮』、42 (4)、1925、49 - 61
 大村梓「ポール・モーランと横光利一：*Champions du monde* と『上海』に描かれたディストピア」、*Polyphonia*、3、2011、43-66
 関容子『日本の鷺：堀口大学聞き』岩波書店、2010
 千葉亀雄「新感覚派の誕生」平野謙他編『現代日本文学論争史 上巻』未来社、2006
 土屋聡「大正期における堀口大学の翻訳」『日本近代文学』、75、2006、87 - 102
 長谷川郁夫『堀口大学：詩は一生の長い道』河出書房新社、2009
 堀口大学『堀口大学全集 第2巻』小澤書店、1981
 -----『堀口大学全集 第5巻』小澤書店、1983
 -----『堀口大学全集 第7巻』小澤書店、1983
 -----『堀口大学全集 別巻』小澤書店、1988
 正宗白鳥「日本文学に及ぼしたる西洋文学の影響」『岩波講座世界文学 第9巻』岩波書店、1933
 マラルメ、ステファン。(鈴木信太郎訳)「フォオヌの午後」『明星』、2 (6)、1922、27 - 34
 モオラン、ポール。(堀口大学訳)「北欧の夜」『明星』、2 (6)、1922、177 - 188
 ----- (堀口大学訳)『夜ひらく』新潮社、1924

- モーラン、ポール。(堀口大学訳)『1/4秒に生きる男』講談社、1958
 吉武好孝『明治・大正の翻訳史』研究社、1959
 渡邊一民『フランスの誘惑：近代日本精神史試論』岩波書店、1995
 Guitard-Auviste, Ginette. *Paul Morand, 1888-1976: légende et vérités*, Paris: Hachette littérature générale, 1981
 Morand, Paul, *Nouvelles complètes*, vol.1, Paris: Gallimard, 1992
 -----, *Nouvelles complètes*, vol.2, Paris: Gallimard, 1992
 -----, *Romans*, Paris: Gallimard, 2005
 Munday, Jeremy, *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*, London; New York: Routledge, 2001
 Omura, Azusa, 'The Birth of Shinkankaku-ha: *Bungeijidai* journal and Paul Morand', *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, 12(1), 2012